

2012年 平成24年

みずのえ・たつ とし ウンキ
壬・辰 歳の運氣

『黄帝内經素問』「六元正氣大論篇第七十一」より抜粋

編纂・解説 皇漢醫學林 椿野央師

テイ のたま たいよう セイ い か
帝 曰わく、太陽の政 奈何に？

黄帝が言われるに、太陽が支配する歳は如何様か？

ギハク もう たつ いぬ キ
岐伯 曰さく、辰・戌の紀なり。

岐伯が云うに、十二支のうちで、辰（たつ）と戌（いぬ）の歳であります。

タイヨウ タイカク タイイン
○ 太陽 太角 太陰

これらの歳は「司天」は上にあって「太陽」寒水

「中運」は上下の気交の正中に在って「太角」風木（五運を五音の調子で表す）

「在泉」は下に在って「太陰」湿土

この「司天」「中運」「在泉」組合わせを考察して一年の気化を占う。

みずのえ たつ みずのえ いぬ
○ 壬・辰 ○ 壬・戌

十干の「壬」と十二支の「辰」、また「壬」と「戌」の組合わせの歳（同じ組合わせは

1/60年、壬辰～壬戌の組合わせは1/30年）

○ ^{その} ^カ ^{メイブン} ^{ケイセキ}
其の化は鳴紊・啓析

鳴紊：鳴；風和かに吹き鳴らす。紊；草木が茂る。 啓析：発生の気、地脉推啓けて崩芽生じる。

○ ^{その} ^{ヘン} ^{シンロウ} ^{サイバツ}
其の變は振拉・摧抜

通常より昂って有余のときは、振：風が振るい起る。拉：（ロウ・くだく）風のために物が折中する。摧：敗れくだく。抜：根より抜ける。

○ ^{その} ^{やまい} ^{ゲントウ} ^{モクメイ}
其の病は眩掉・目瞑

民衆の罹りやすい病は：眩暈（めまい）、頭が振掉して、目瞑く閉じて開かない。これらはみな「風木」の太過による。

^{タイカク} ^{シヨウチ} ^{タイキュウ} ^{シヨウシヨウ} ^{タイウ}
太角_{初正} 少徴 太宮 少商 太羽_終

五行	木	火	土	金	水	
五音	角	徵	宮	商	羽	
主運	初運	二運	三運	四運	終運	
節氣	大寒～	春分～	芒種～	処暑～	立冬～	
主運	太角	少徵	太宮	少商	太羽	地氣の主運は毎年変わらず
客運	太角 _{初正}	少徵	太宮	少商	太羽 _終	天氣の客運は年毎に変わる

この主運と客運の組合わせによりその歳の時候の運氣の変化を測る。

司天	太陽	太陽	太陽	太陽	太陽
中運	太角	太徵	太宮	太商	太羽
在泉	太陰	太陰	太陰	太陰	太陰
歳	壬・辰	戊・辰	甲・辰 _{歳會}	庚・辰	丙・辰 _{天符}

歲	壬·辰	戊·辰	甲·辰 <small>歲會</small>	庚·辰	丙·辰 <small>天符</small>
歲	壬·戌	戊·戌 <small>同正徵</small>	甲·戌 <small>歲會</small>	庚·戌	丙·戌 <small>天符</small>
其運	風	熱	陰埃 雨	涼	寒
其化	鳴紊·啓析	暄暑·鬱燠	柔潤·重澤	霧露·蕭颺	凝慘·凜冽
其變	振拉·摧拔	炎烈·沸騰	震驚·飄驟	肅殺·凋零	冰雪·霜雹
其病	眩掉·目暝	熱鬱	濕 下重	燥·背脊胸滿	大寒溜於谿谷
初運	太角 <small>初·正</small>	太徵	太宮	太商	太羽 <small>終</small>
二運	少徵	少宮	少商	少羽 <small>終</small>	太角 <small>初</small>
三運	太宮	太商	太羽 <small>終</small>	少角 <small>初</small>	少徵
四運	少商	少羽 <small>終</small>	太角 <small>初</small>	太徵	太宮
終運	太羽 <small>終</small>	少角 <small>初</small>	少徵	少宮	少商

○ およ この タイヨウシテン セイ キ カ 凡そ此の太陽司天の政 氣化 運行 天に先立つ。

およそ、この太陽司天が支配する歳は季節の訪れが天の運行よりも15日くらい早めに来る「太過」の歳である。(不及の歳は15日くらい季節が遅れる)

はげ 天氣 肅しく、地氣 静かなり。

司天の太陽の寒氣は肅：激しく、在泉の太陰の湿氣は静かである。

シンセイ チンセイ 上 辰星・鎮星に應ず。

上：天体では司天は水に属する辰星：水星と在泉は土属する鎮星：土星が輝きを増す。上半年は司天が主で、辰星（水星）が益々光を増し、下半年は在泉の主で鎮星が益々光を増す。

ゲン キン 其の穀は玄・黔 シュク 其の政は肅 其の令は徐

色が玄：黒で司天の寒水に属する穀物は、上半年に益々盛ん。黔：黄色で在泉の湿土に属する穀

物は下半年に益々盛んに採れる。 司天の政は寒肅：寒さ厳しく、在泉の化令は徐：ゆるやか

寒政 大いにキョ擧し、澤にヨウエン陽燄なければ則ち火發すること時を待つ。

司天の寒令が多いに行われ、熱気が降りて来ず、澤に陽燄無きときは：山の谷川や沢から煙のように立ち昇るもやがないときは、寒気が火気を押さえ鬱伏する。鬱塞するときは、陽気がやって来る時を待つ。

少陽 中におさ治め、時雨 ジウ 迺 いたる 涯る。

客気である太陽司天が主気の少陽相火の「第三の気」の上に加わってくる。今、太陽司天の寒水が主気の少陽相火の上に在って火を制するため時雨：しぐれ；涯：いたる；水際

止まり極まりて、雨散じ太陰に還る。

「三の気」が終る頃から「四の気」始まるころにかけ、時雨が降っては止み、寒水が大雨を降らす。

雨が上がり「四の氣」から歳の後半は地氣の在泉の太陰湿土が司る。

雲 ^{チヨウ} 北極に朝して、^{シ ッ カ} 濕化 ^{しく} 迺 布く。

歳の後半は在泉が運行を司り、北方は雨府と云い水の会うところで、湿氣が布き延べる。(朝：朝會；臣下が朝廷にまいり集ること)

澤 萬物に流れ、寒 上に敷き、雷 下に動ず。

沢の湿氣はあちこちに流れ行き、寒水が上に敷き、火が下に鬱するためにはばしば落雷がある。

寒・濕の氣 氣交に持す。

司天の太陽寒水と在泉の太陰湿土の氣がこの歳中は天地の間の氣の交流を受け持つ。

民の病：^{カンシツハツ} 寒濕發し、^{キニクシホ} 肌肉萎み、^{あしなえ} 足痿て収まらず、

^{ジュシヤ} 濡寫 ^{ケツイツ} 血溢す。

民衆の罹りやすい病気は：寒湿の病を発し、筋肉が萎んで麻痺し、足が萎えて云うことをきかなくなり、下痢をする。これらは司天の寒、在泉の湿の影響で生じる。そして上の七竅（目・耳・鼻・口）などから出血する「火發待時」

○ 初の気は：

初の気：大寒：陽暦 2012/1/21（旧暦 2011/12/28）～春分：陽暦 2012/3/20（旧暦 2012/2/28）

客気は少陽相火。主気は厥陰風木

地気かえり 遷り、氣 迺 大温、草 迺はや 蚤く榮う。

地気遷り：地気は去年の在泉の気で少陰君火。客の初の気は少陽相火で二つの火が合わさるため、天地間の気候の変化は通常ならば、まだ寒いときなのに、反って大いに温暖である。まだ冬の寒冷の時であるのに、草木が芽を出し生長する。

民 迺レイ 厲し、温病ウンビョウ 迺おこり 作り、身熱、頭痛、嘔吐、

キソウ ソウヨウ
肌腠 瘡瘍す。

客気は相火、主気は風木で風と火が相打ち、民衆では厲：疫病が流行り、温病が起り、身体が熱がこもり、頭痛がし、嘔吐し、肌皮膚がただれるような症状をおこしやすい。

二の気は：

二の気は：春分 2012/3/20～小満 5/21 客気：陽明燥金、主気：少陰君火

大涼 反って至り、民 迺^{いたみ} 惨み、

主気の少陰君火の上を客気の陽明燥金が覆っているため、通常はこのころより温かくなるはずが、反って大いに涼しくなり、冷えにより痛む。

草 迺 寒に遇い、火氣 遂に抑らる。

主の君火が大涼の気に抑えられ草木も寒気に遭う。

民の病：氣鬱、中満し、寒 迺 始まる。

民衆の罹りやすい病は：陽気が抑えられて巡らず鬱状態、寒冷の気が腹中に停滞して腹張る。二の気が終ろうとする時に寒気がやって来る。(三の気の客気：太陽寒水の影響)

○ 三の気は：

小満 5/21～大暑 7/22 客：太陽寒水、主：少陽相火

天の政 布きて、寒氣 行われ、雨 迺 降る。

司天の太陽寒水の政と三の気の客気の太陽寒水が合わせ布かれ、寒気が来て、雨が降る。

民の病：寒 反りて熱中し、癰疽^{ヨウジュン} 注下し、

心熱^{ボウモン} 瞽悶す。治せざる者は死す。

民衆の病は：寒さのために体表を閉じて陽気が体内に停滞し鬱熱を生じ、癰疽などの化膿性のデキモノができ、寒、または内熱のために下痢し、胸に熱がこもり、瞽悶：目がくらみ、煩悶する。もし、治法を誤って治せないときは、陽気が絶して死に至る。

○ 四の氣は：

四の氣：大暑 7/22～秋分 9/23 客氣：厥陰風木、主氣：太陰湿土

風濕 交々争い、風 化して雨と爲り、迺 長じ、
迺 化し、迺 成る。

客氣の氣化のため風と湿氣が互いに争いあい、風が雲を運び、変化して雨が降る。風木は湿土から栄養をもらい、長じ、変化し、成る。(木：生、火：長、土：化、金：收、水：藏)

民の病：大熱、少氣、肌肉 ^{しほ} 萎み、^{あしな} 足痿え、注下 赤
白す。

民衆の病は：厥陰木が大暑の時に木→生→火でさらに大熱を生じ、客氣の厥陰肝木→剋す→主氣の太陰脾土。そのため息切れしたり、肌肉が萎み、足が痿えて、白や赤い便を下痢する。

○ 五の氣は：

五の気：秋分 9/23～小雪 11/22 客気：少陰君火、主気：陽明燥金

陽 再び化し、草 迺 長じ、迺 化し、迺 成り、
民 迺 舒^のぶ。

秋で涼しくまた寒くなる季節なのに、歳の後半は在泉の太陰湿土の気と客気の少陰君火の影響で陽気が再びやって来て、枯れるはずの草木が再び生長し変化し実が成る。人々も温かくのびのびと生活できる。（ここ三年間は秋冬の訪れが遅く、紅葉も遅れ、温暖である）

○ 終わりの気は：

終わりの気；六の気：小雪 2012/11/22～大寒 2013/1/20 客気：太陰湿土、主気：太陽寒水

地氣 正しく、^{シュウレイ} 濕令 行わる。

在泉の太陰湿土と客気の太陰湿土と合致して湿の働きが正常にはたらく。

陰 太虚に凝り、埃^{ほこり} 郊野^{コウヤ}に昏^{くらし}し。

客気の湿土と主気の寒水の陰湿の気が霧や雨で埃で覆われたようにうっとうしい天気になる。

民 迺^{サンセイ} 惨悽す。寒（風） 氣 以て至る。

反^{はら}する者は孕みて迺 死す。

民衆は陰気が盛んで陽気が衰え易く、惨悽：いたみかなしむ。寒：主気の寒水、風：在泉、客気の湿土が重なるため風木の気が復す。

今、季節でもない風が吹くので、妊婦は妊娠中の養生が悪いと、流産し易くなるので要注意。

○ 故に歳 宜しく苦 以て之を燥かし、之を温たむ。

必ず其の鬱^{たすく}氣を析きて、先ず其の化源を資く。

其の運氣を抑え、其の勝たざるを扶^{たす}け、暴過して其の疾を生ぜしむる無かれ。

歳穀を食らいて以て其の真を全うし、虚邪を避けて、以て其の正を安んず。

氣の同異・多少を適^{はか}りて之を制す。

寒濕に同じき者は燥熱の化、寒濕に異なる者は燥濕の化。

故に同じき者は之を多くし、異なる者は之を少なくす。

寒を用いるは寒を遠ざけ、涼を用いるは涼を遠ざけ、温を用いるは温を遠ざけ、熱を用いるは熱を遠ざく。

食宜 法を同じくす。
假ある者は常に反す。是に反する者は病む。
所謂 時なり。
帝 曰く、善し。

2011/12/11 皇漢医学林/岡山 講師：椿野央師 編著・訳